OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国籍／エスニシティ／階層を超える・つなぐフェミニズム ： アジアのグローバルシティと女性たち
Author(s)	北村, 文
Citation	架橋するフェミニズム ： 歴史・性・暴力. 2018, p. 67-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国籍／エスニシティ／階層を超える・つなぐフェミニズム
――アジアのグローバルシティと女性たち

北村文

（津田塾大学学芸学部）

牟田和恵（編）『架橋するフェミニズム―歴史・性・暴力』第６章

2018.3.20　電子書籍版刊行

https://doi.org/10.18910/67844

ISBN978-4-87974-740-2　C3836

JSPS 科学研究費基盤（B）課題番号 26283013

国籍／エスニシティ／階層を超える・つなぐフェミニズム――アジアのグローバルシティと女性たち

北 村　文

1. 引き裂かれた女性たち

フェミニズムは女の運動であり、女性たちの共感や協働がそのちからである。にもかかわらず、連帯すべき女性たちがむしろ断絶してしまっている――この問題は、フェミニズムが「女」のなかに存在する差異に気づいたときから、今も解かれないまま残されている[注1)]。

女性たちは、ふたつの意味において引き裂かれている。いっぽうには、女性のあいだの分断がある。国や地域、人種やエスニシティ、宗教、階層、セクシュアリティ、言語、文化、教育、世代といった差異は、私たちに異なる経験をもたらす。同じ「女」だからといって、かんたんに手をとりあえるわけではない。他方、ひとりひとりのアイデンティティはそうした複数の境界線の結節点であるがゆえに、多くの矛盾を女性たちにもたらす。たとえば「女」である自分と「日本人」である自分が相容れなかったり、あるいは、ゲイである私を職業上は隠さなければならなかったり。私たちのアイデンティティが「インターセクショナル」である――様ざまな差異が交差する場である――ということは、ただ私たちが複数の社会的要素の集合体であるということを意味しない。そのために生じる矛盾や分断、軋轢にこそ注目しなければならない（Yuval-Davis 2006）。

本稿では、グローバルシティ、なかでも急成長を遂げる、それゆえに問題も堆積している、アジアのグローバルシティに注目し、そこでいっそう深刻化する女性たちの格差と分断の問題をとりあげる。言うまでもなく、これらの都市には、グローバリズム、ネオリベラリズム、そして性別分業をはじめとするジェンダー秩序の重層的な構造があり、女性たちを引き裂いている。その深すぎる溝に、女性たちは、どう対峙しているのか。フェミニズムには何ができるのか。

以下では特に、アジアの移住家事労働者についての理論的議論およびエスノグラフィックな調査研究を概観したうえで、まず、弱い立場におかれた女性たちの抵抗の運動に注目する。次に、女性間の差異を超える・つなぐフェミニズムのひとつの可能性として、香港のフェミニスト団体 Association for Advancement of Feminism（AAF、新婦女協進會）[注2)] の活動を参照・分析し、女性から女性への想像力の涵養の可能性を論じる。女性たちのエイジェンシーに光を当てるとともに、移動とジェンダーの問題がいよいよ顕在化しつつある日本社会への示唆をさぐることが、本稿の目的である。

2. アジアのグローバルシティと女性たち

2.1 再生産のグローバル化――アジアの場合

現代社会においては、国境を越えて、人が、モノが、資本が、情報が、めまぐるしく移動する。なかでもアジアのグローバル化は、その速度にも程度にも目を見張るものがある。

> アジアにおけるグローバリゼーションは、一方では輝く未来を見出そうとしたプロジェクトとしてあらわれるとともに、他方ではかつての植民地支配を想起させるような絶望的な世界が生み出されてきた。・・・現代のアジアにおける人の移動は、グローバリゼーションの光と影を映し出す鏡でもある。（伊豫谷 2013: 211）

中国やインドといった新興国、香港やシンガポールなどのグローバルシティ。そこには確かに、急速な発展の恩恵に浴するニュー・リッチたちがいて、まさにそれぞれの地域の「輝く未来」をおもわせる。しかし同時に急激な開発は都市部だけでなく地方にも消費主義をもたらし、新たな貧困層を生じさせてもいる。グローバル化がもたらしたのは「光と影／陰」、そしてその間の深刻な格差である。特に、新興都市の建設現場で、多国籍企業の工場やオフィスで、そして中上流の家庭内で、使い捨てられるように働く人びとの姿は、まさに「絶望的な」様相を呈しているといえるだろう。

そうしたなかでももっとも色濃い「陰」のひとつが、本稿が注目するグローバルシティにおける女性間の分断と格差である。Saskia Sassen（1991=2008; 2002）による議論を参照しよう。グローバル化は人や資本の移動を促すが、同時に、その戦略的な集中と蓄積も引き起こす。その中心となる大都市には、国境をひらりと超えつつ現代的で便利なライフスタイルをくずすことのないグローバルエリート、そしてその家族が集合する。グローバルシティは、したがって、彼ら彼女らを含む高所得職種層にサービスを提供する人びとを必要とする。たとえば金融や情報、IT の多国籍企業が居を構える高層ビルで、清掃や警備にあたる者、カフェテリアの調理や配膳をする者、コピーをとったり郵便を仕分けたりする者。また、個々の世帯において、就労する夫や妻にかわって食事の準備、住居の清掃、衣服の洗濯、そして育児や介護を担う者。そうした「陰」の仕事は、多くの場合、低賃金の不安定就労で、それゆえにより貧しい地域から移動してくる人びとが担うこととなる。グローバルシティには、この高所得職種層と低所得職種層の二極化がはなはだしく、それは、国際分業とジェンダー分業によって成り立っている。

低所得職種の移住労働者のなかでもいっそう弱い立場におかれるのが、移住家事労働者の女性たちである。彼女らは、たとえばフィリピンやインドネシアのように、家事労働者の「輸出」を国策とする国々からやってきて、香港やシンガポール、台北といった「輸入」ルートをもつグローバルシティで働く。それまで妻が担ってきた家のなかの仕事の数かずを、彼女らが安価で肩代わりするのである。いまや彼女らの労働なしに、これらグローバルシティの中上流階級の生活は成り立たない。落合恵美子によれば、「家事労働やケア労働はもはや家庭内でも一国内でもなく、グローバルに再配置される時代になった。『再生産のグローバル化』と呼ばれる現象である」（落合 2012: 20）。

このようにグローバルシティでは、もはや「個人的なことはグローバルなこと」（Hochschild 2002: 30）である。それは同時に「個人的なこと」が公的なサービスによって支援されず、もっぱらグローバル化された市場において解決されねばならないということも意味する。落合（2012）は先に続けて、アジア的特徴として以下の二点を挙げている。第一に、公的な福祉サービスが未整備であり、育児や介護がそれぞれの家族が私的に解決する問題となっているということ。女性の就労は、したがって、公的な制度や施設ではなく、私的に契約したケア労働者――多くの場合より安価に雇える移住家事労働者――によって支えられざるをえない。第二に、これら地域の政府は、移住家事労働者のためのビザプログラムを特設しており、そこで彼女らに許されるのは一時的で限定的な滞在のみであるということ。すなわち、彼女らは一定の年限のなかで家事労働に就くことだけが許されており、市民権や永住権を得ることはおろか、家族を呼び寄せることすらできない。さらに彼女らが許されているのは、ビザのスポンサーとなる雇用主の家で働くことのみであり、職場のかけもちも、もちろん転職もできない。雇用主は、労働者の女性の住まいを準備し、食事／食費を与え、休日を確保しなければならないが、これらの規則は秘密裏に破られることも多く、また同時に、彼女らを「保護」するという名目のもとに「監視」することにもつながる（Lan 2006; Piper and Yamanaka 2008）。このように、アジアの移住家事労働者たちは、グローバル化と市場化の波にさらされるとともに、送出国と受入国の国家による規制によってしばりつけられてもいるのである。

言うまでもなく家事労働は、個人の家のなかという閉じた空間のなかで行われる。一時的な滞在しか認められない外国人、それも、貧しい国からやってきて、他から隔絶された女性が、自らの権利を十全に享受できなくても、それがただちに公になるわけではない。ケア不足を埋めることができず、トランスナショナルに外注しているにもかかわらず、その労働を担う女性たちを「人」としてではなく、ただ「労働力」としてのみ扱うアジアのグローバルシティ。それはまさに Sassen が言うように、「隔離され、分散され、うまいぐあいに不可視化された労働者階級をつくりだしている」（Sassen 2002: 255）。女性たちは必要とされながら、時に隠され、都合よく使い捨てられるのである。

このように、再生産のグローバル化は、豊かな女性と貧しい女性のあいだの「ウィンウィンの」関係を決して意味しない。そこに生じるのは、「光」のライフスタイルを維持する女性たちと、それを支えながらも「陰」に閉じこめられた女性たちのあいだの、深く広い溝である。

2.2　移住家事労働者たちのヴァルネラビリティ

東南アジアと東アジアを移動する家事労働者の女性たちについては、数かずのエスノグラフィー Briones 2009; Constable 2007; Lan 2003, 2006; Lindio-McGovern 2013; 小ヶ谷 2001, 2008; Ogaya 2004; 上野 2011; Ueno 2014）がその詳細を明らかにしてきている。概して、彼女らのおかれた状況はまさに「絶望的な世界」といえよう。しかしそれは彼女らが本質的に弱く脆いからではなく、彼女らが「構造的条件・諸アクターとの関係性の中で立場が弱くなる傾向にある」という意味での「ヴ

ァルネラブルな」位置におかれているからである（小ヶ谷 2008: 110）。

上述のように、これらアジアの地域では送出国と受入国がそれぞれ「輸出」と「輸入」に積極的であるいっぽうで、労働者の女性たちを厳密な統制下におく。そして実際の管理／監視が民間業者に託されていることも、特徴的である（Lan 2006）。送出国の斡旋業者が、「たったひとつの均一な製品、すなわち、働き者で、従順で、素直なドメスティック・ヘルパーという商品の製造」（Constable 2007: 69）にあたり、受入国の業者へと手渡す。女性たちは言語や料理といった実践的なスキルに加え、雇用主の前でどう振る舞うか、自身をどう見せるのかを学ばねばならない。礼儀正しく話す、笑顔をたやさない、疲れをみせない、髪を短くし、アクセサリーはつけず、シンプルな服装で――家事労働のためのトレーニングが、女性たちの身体統制へとつながっていくのである。業者と雇用主は、女性たちの年齢、健康状態、肌の色、身体のサイズをためらいもなく話題にし、彼女らの身体を値踏みする。「頭のいいフィリピン人」とか「素直なインドネシア人」といったステレオタイプもまた彼女らのマーケティングに利用され、ひとりひとりの「マリア」や「ラニー」ではなく、商品としての「メイド」が売り買いされていく。

この送出国業者から受入国業者へという一連のプロセスは、より直接的に移住女性たちを苦しめることにもなる。女性たちの多くは出国・入国のための手数料を事前に払うことができず、業者に借金することでようやく移住の出発点に立つ。金銭的に高いコストをともなうというだけではない、女性たちは負債を抱えて仕事を始めるがゆえに、たとえ不利な雇用条件であったとしても、すぐに辞めたり帰国したりすることができない。また、返済の過程で不当な利子をつける、金融会社でローンを組むことを強要する、といった違法行為も後を絶たないが、送出国・受入国の双方ともに政府がじゅうぶんな対策をとっていないことも事実である。

いったん個人の住宅のなかで働き始めると、今度は、彼女らを統制し監視するのは雇い主、それも多くの場合女性雇用主――「マダム」たち――である。料理する、配膳する、洗濯する、掃除する、そして子どもや高齢者の世話をする、どの行程においても、労働者たちの自律性が重んじられることは少なく、マダムたちが事細かな指図を与える。Pei-Chia Lan（2006）の台湾におけるエスノグラフィーには、「メイドの仕事」と「マダムの仕事」の線引きにやっきになる女性雇用主たちが多く描かれる。多くの場合、前者には掃除や洗濯といった単調な肉体労働、後者には育児をはじめとする精神的なケア要素が求められる仕事が含まれる。この境界は決して超えてはならないものであると同時に、マダムたちによって都合よく引き直される。法的に定められた休日でさえも朝食や夕食の準備をさせられたり、睡眠時間を削って夜通し子どもをあやしたり、さらにはペットや親戚の世話までもが負担となりうる。

実際の労働だけではない。マダムたちはメイドたちを空間的にも、時間的にも、身体的にも拘束する。雇用主が用意する住居は、たいていの場合「メイド部屋」と呼ばれる、小さなベッドをひとつおけばいっぱいになるような小部屋――多くの場合、キッチンや洗濯場の横にある――で、そこすら完全にプライベートな空間ではなく、雇用主家族が出入りしたり、物音が筒抜けだったりする。それすら与えられず、子ども部屋やキッチンで寝起きすることに「同意」させられる労働者もいる。彼女らが食事する時間、シャワーをとる時間、寝る時間、時には休日の過ごし方まで、彼女自身ではなく雇用主が決め、しかもそれもいかようにも変わる。

メイドたちに与えられる「罰」も、重大な問題である。雇用主の意にそぐわないという理由で給与や休日をカットされることもあれば、ひどいときには、言語的物理的暴力におよぶこともある。法的には禁じられているはずのこうした虐待が、見えないところで横行していることは想像にかたくない。2014 年に香港社会を揺るがせた「エリウィアナ」事件は、インドネシア人移住家事労働者の女性が日常的な過重労働そして度重なる暴行の末に、強制的にインドネシアに送り返されたというものだが、この虐待は、偶然その飛行機に乗りあわせた別の移住女性の手によって白日の下にさらされることができた（イプ 2015; Justice for Erwiana Action Centre 2017）。彼女の前に、そして後にも、沈黙させられた「エリウィアナ」がどれだけいるか数知れない。直接的な「罰」ではなくとも、雇用主たちから解雇されてしまうかもしれないという精神的な脅威もある。メイドの換えはいくらでもいるのだから、と。移住女性たちは上述の借金ゆえに、あるいは自身の雇用歴に傷がつくことを恐れ、搾取や監視、暴力を耐え忍ばねばならないのである。

言うまでもなく、同じことをメイドたちがマダムたちに対してできるわけがない。相手の空間的時間的配置を決めていいのも、そしてそれを気ままに変えていいのも、ひとえにマダムのみである。取り決め以外のことが生じたときに罰を与えられるのも、契約破棄のすえに出国させられる心配をしなくてよいのも。同じ屋根の下に住む「マダム」と「メイド」は、このように、絶望的なまでに隔絶している。

たとえ「家族の一員にように」扱われているメイドであったとしてもそれは同じである。「家族」であるがゆえに、労働条件に不満があっても言い出せなかったり、労働時間外のケア――突然の病気、深夜の夜泣き、休日のホームパーティ――にも対応することが当然とされたりしかねない。毎日世話をする子どもへの愛着から、移住女性自身もそれに応えてしまい、「子守り」である自分と「労働者」である自分とのあいだで引き裂かれてしまうかもしれない。Theodora Lam, Brenda S.A. Yeoh and Shirlena Huang（2006）によれば、シンガポールにおいては、国家が住込みの移住家事労働者を「家族の一員」であると謳いあげ、1999-2000 年の調査では雇用主の 87.1%が「良好な関係である」と答えている。しかし Lam らは、その背後に「監視と服従に基づく主人と奴隷のような関係から、雇用主が都合よく距離を保てるビジネスライクな関係まで」が隠されている、と指摘する－－「さらに、外国人家事労働者が『家族』でもないし『他人』でもないというあいまいな関係におかれるがゆえに、緊張関係がもたらされるという事実もまた、無視されてしまっている」（Lam, Yeoh and Huang 2006: 485）。

このように、移住家事労働者たちのおかれた位置は幾重にもヴァルネラブルである。さらに彼女らが住むグローバルシティにおいては、多人種・多文化の共生が掲げられるいっぽうで、人種的-空間的分離（Ong and Yeoh 2013）も依然として存在し、「貧しい国からきた外国人」の彼女らは隔絶され周縁化され、人種／エスニシティの偏見にもさらされている。Barry Sautman（2004）は香港を「エスノクラシー」、すなわちエスニシティによって階層化された社会であると表現する。そこでは、現地の香港人（「シティズン」）たちに次いで、グローバルエリートに代表される特権的な一時滞在者（「デニズン」）たちが重んじられるが、移住者（「マージズン」）たちは蔑視され周縁化されている。そこでも移住家事労働者は、もっともヴァルネラブルな存在である。東南アジア出身の女性たちを「ずるがしこい」「頭が悪い」さらには「性的に放埒」といったステレオタイプのもとにおき、排除しようとする社会の態度は、彼女らの権利を制限する政府の態度によって助長されてもいる（Sautman 2004: 124）。事実、シンガポールにおいては移住家事労働者の女性たちに半年に一回の妊娠検査が義務づけられているが――彼女らがシンガポール国民を産まないよう、妊娠が判明したとたん帰国させるため――、これはまさに、「排除すべきよそ者」という彼女らの社会的地位が、政府によって強化されているもうひとつの例といえるだろう。その意味で、香港にせよシンガポールにせよ、政府が喧伝する多民族主義・多文化主義は「空っぽ」で「人工的な」ものにすぎず、そこにおいて「低い地位で非熟練労働に就く者たちは、組織的体系的に、忘れ去られている」（Ong and Yeoh 2014: 87）。

移住女性たちが担う再生産労働に対する社会的価値づけもまた、女性たちのヴァルネラビリティを助長する。伝統的に、ケアは、特にアジアでは、家族のなかで――それはすなわち女性たちによって無償で――担われてきた労働であるがゆえに、それだけをするために移住してきた女性たちは、他の労働者と同等の権利を有することが認められ難い。彼女らはあくまでも「メイド」「ヘルパー」であって「労働者」ではない、と。

> 親密性が雇用に姿を変えたとたん、愛情のなせる仕事ではなく、誰でもできる非熟練労働とみなされるようになる。この剥奪を二重の剥奪と呼ぼう。無償であるということに加えて、労働者の資質までもが軽んじられてしまうのだから。（Boris and Parrenas 2010: 11）

最後に、そしてもっとも重大なことに、移住家事労働者たちは女性であるがために、さらなる剥奪を経験する。上述のように監視され規制される彼女らの身体は、同時に、閉ざされた私的空間において性的暴力にさらされてもいる。Ligaya Lindio-McGovern（2013）のエスノグラフィーには、女性たちが寝床にナイフをしのばせたり、自室のドアのまえに机でバリケードをつくったりして自衛手段をとる姿、そして、レイプ被害にあった移住女性がシェルターに駆け込んでくる姿が描かれる。これらサバイバーの女性たちが保護され、支援を受けて法的闘争に挑むことも少なくないが、そうではあっても彼女らが受けた肉体的・身体的な傷の深さは想像を絶するものである。移住女性たちは商品、モノ、とみなされるがゆえに、そして劣等で使い捨てられる外国人とみなされるがゆえに、「人間性を奪う最たる手段」であるところの性暴力にもヴァルネラブルである（Lindio-McGovern 2013: 36）。

さらに、移住家事労働者のレイプやセクシュアルハラスメントにおいては、往々にして、雇用主ひいては社会全体が、その責任を移住女性たちに転嫁する。彼女らが夫や息子をだました、たぶらかした――こうしたレイシストでミソジニックな猜疑心は「性的に放埒な東南アジアの女たち」というステレオタイプへとつながっていく。彼女らは劣っていて自身の性すらコントロールできない、だから監視し管理しなければならないのだ、と[注3)]。

移住先で家事労働を担う女性たちを、束縛し、蔑視し、権利そして尊厳までもを奪うグローバルシティの構造。Aihwa Ong

はこれを「新奴隷制」と呼んではばからない。

> 移住女性の新奴隷制は、人種的彩りをされた国家主義、新自由主義的な戦略、姻族とエスニシティに基づく、分裂したモラルエコノミーといったポスト・コロニアルな交差から生まれた。・・・豊かになった国家の中産階級の権利を守るための生政治的関心は、外国の他者がどれだけ融通をきかせてくれるかに頼っており、階級の特権的環境と、貧しい女性移民の奴隷のような労働条件を許してしまう偏見を創出する。このように生政治的割れ目が歴然とあり、それに加えて、誰が道徳的に価値ある人間で、誰がそうでないのか、といったより複雑な概念が、人種とモラルエコノミーのあいだを引き裂くのである。（Ong 2006=2013: 294）

女性が女性に仕える社会では、女性が女性を抑圧し、女性が女性を搾取する。女性と女性は対立するほかない。誰が誰をどのようにケアするのか、どういった条件下で、何を犠牲にして。そのように女性間で交渉――きわめて不平等な――が続くとき、再生産労働はとりもなおさず「女の問題」として扱われ、ケア労働が男性によって担われることはない。社会において支配的なジェンダー役割のイデオロギーが変化することはないのである（Brooks and Devasahayam 2010: 43）。

性別分業は継続する。国際分業によって肩代わりされながら。グローバルな不平等を下敷きにして、それを強化して。女たちをいっそう引き裂いて。この深遠たる「生政治的割れ目」に対して、女性たちには何ができるのだろうか。

3. 抵抗、エイジェンシー、想像力

女性移住家事労働者たちを「非・安全」な位置にすえつける構造は、ナショナルだけでなく、リージョナルに、そしてグローバルに張り巡らされている（柄谷 2007）。それでは、こうした構造のなかにおかれた女性たちは、ただ搾取と暴力にうちひしがれた、受動的な被害者なのだろうか。多くの移住家事労働者研究、特にエスノグラフィックな方法をとる研究は、実は、女性たちのヴァルネラビリティだけでなく、彼女らの抵抗や交渉、エイジェンシー――そのおかれた構造に働きかけるちから――もみとっている。

3.1 抵抗の運動

Piper（2008）によれば、移住家事労働者の女性たちが受入国の労働法や労働組合から恩恵をうけることは難しい。多くの地域において彼女らは、インフォーマルセクターに従事するということ、一時滞在者であるということ、そして女性であるということから、労働者保護の制度から排除されてしまうのである。そのとき、女性たちが向かうのは、彼女らの支援を目的とする現地社会のNGOやNPO、そして移住女性自身が構築する組織でありネットワークである。

具体的な例をみていこう。フィリピンは家事労働者の最大の「輸出」国のひとつであるがゆえに、移住労働者たち、そして彼女らが自国に残していく家族の権利を求める運動もまたさかんである。なかでも1996年設立のMIGRANTE Internationalは、23カ国の200を超える団体から成る大規模な組織である。MIGRANTEのようにひとつのナショナル・グループを対象にするのではなく、ナショナリティや人種、エスニシティにかかわらず移住労働者全体を対象にする組織もある。たとえばMigrant Forum in Asia （MFA）は、アジア全域で250以上のNGOを束ねる大規模な組織であり、日本の「移住者と連帯する全国ネットワーク」もメンバーに名を連ねている。それぞれの地域でナショナルに活動する組織が、このようにトランスナショナルなネットワークに連なっていることで、より強固な組織化が可能となる。加えて、移住労働者たちは、移住先でとつぜん不利な条件下におかれて戸惑うのではなく、出国前から自身の権利に対する意識をもち、トラブルに直面したときにどこへ行き、何をすべきかを知っておくこともできる。

移住労働者が労働組合などの組織活動をする権利が保障されている香港においては、移住家事労働者たちのデモンストレーション行動も珍しくない。なかでも、United Filipinos in Hong Kong （UNIFIL-HK）は20を超える団体から成る組織で、1985年の設立以来、フィリピン人移住労働者――その多くが家事労働者の女性である――の権利保護を訴え、労働者たちの商品化に抗してきた。Lindio-McGovern（2013: 48-9）はこの組織の「偽ファッションショー」に参加した経験を記しているが、これは、2000年にフィリピン領事館が独立記念日に高級ホテルでディナーショーを催したことに抗議して、家事労働者たちが集結した運動である。彼女らは在香港フィリピン人の大多数を占めているにもかかわらず、こうした公式のイベントからは排除されている。女性たちはドレスを身にまとうとともにモップや箒を手にし、ホテル前で抗議の声をあげた――移住家事労働者らが日々直面している現実の問題を無視して、現地の富裕層だけをもてなすなんて、と。

フィリピン女性たちが大規模で組織だった運動を繰り広げることで知られるいっぽう、インドネシア女性たちは彼女らに比して「より従順」したがって「より低賃金で雇える、休日も少なくてよい」などと長く言われてきた。しかし彼女らもまた、受入国での人数が急増するとともに組織化し始めている。小ヶ谷千穂（2008）によれば、2000 年設立の IMWU（Indonesian Migrant Workers Union、インドネシア労働者組合）は、香港のインドネシア領事館前で抗議活動を繰り返し行い、家事労働者たちが契約終了後、同じ雇用者と再契約する場合にはいったん帰国しなくてもよいとする規定をとりつけた実績を擁する。ATKI（Associasi Tenaga Kerja Indonesia di Hong Kong インドネシア移住労働者協会）は、同様にインドネシア・香港の両政府に働きかけるとともに、インドネシア女性たちに法的支援を行ったり、ワークショップやカウンセリングを提供したりもしている。また、イプ（2015）によれば、香港においては、FADWU（Hong Kong Federation of Asian Domestic Workers Union、アジア家事労働者組合香港連盟）のように、多様なナショナリティの移住労働者、そしてさらにローカルの家事労働者をも含んだ、新たな組織化も起きている。

加えて、香港とは異なり、移住労働者が労働法の外におかれた台湾においてもまた、移住女性たちの運動が起きているという（Lindio-McGovern 2013）。たとえば Ifugao Association は、いまだ組織化もじゅうぶんでないながら、上記の UNIFIL 同様の目的を掲げ、ブローカーの手数料の引き下げのための署名活動を行っている。こうした草の根の活動は、移住女性たちをもっとも苦しめる債務問題に直接的に働きかけるとともに、女性たち自身の権利意識の向上にもつながるといえるだろう。

Ogaya（2004）によれば、これら女性たちの政治活動は、大々的な抗議行動やキャンペーンにはじまり、移住労働者の権利にかんするセミナーの開催、リーダーシップの育成、シェルターの運営など、幅広い。これら「社会運動型」に加えて、香港とシンガポールにおいては、移住労働者たちのスキル向上や彼女らの宗教的文化的ニーズにこたえる活動もさかんであるという。女性たち個々人の健康と幸福、キャリア、意識の向上そして集合的運動が、有機的に結びついて大きなうねりを生み出しているといえるだろう。女性たちは時に声をあげ、拳をあげ、あるいは互いに支えあい、学びあい、彼女らを搾取しようとする構造のなかでエイジェンシーを発現させているのである。

3.2 弱者の武器

女性たちのエイジェンシーは、よりインフォーマルな文脈においてもあらわれる。休日を雇用主の家で過ごすわけにもいかない移住女性たちは、グローバルシティの一角――香港のセントラルやヴィクトリアパーク、シンガポールのラッキープラザ、台湾の台北駅や桃園駅など――に集結する。地面や階段に座りこみ、食べものや飲みものを広げ、おしゃべりに興じ、時に踊り歌い、時に怒り泣き、組織だった運動ではなくとも、自然発生的に自助活動を繰り広げるのである。Constable（2007）のエスノグラフィーには、毎週日曜日に香港の街角に登場する、フィリピン女性によるフィリピン女性のための「エリーのヘアサロン」が描かれる。

> 年輩の香港人が立ち止まって眺めている。また下品なやつらがプライベートな身繕いをパブリックな場でやっている、と。エリーとその仲間は「面の皮を厚く」しなければならない。通行人たちの偉そうな視線をはねのけてやらねば。頭の禿げた老年男性が彼女らのことを睨みつけ、不満そうに指差しているのも、笑いの種にしてやるのだ。彼にはわからない言語で、「あの人も切ってもらう髪があればいいのにね！」、あるいはもっと攻撃的に、「切ってほしいんならカミソリでやってやるよ！」、と。(Constable 2007: 167)

毎日曜日に街を「占拠する」移住女性たちの姿は、香港において現地の人びとの不満や困惑の源ともなる――香港に住む彼女らに、その権利は当然保障されなければならないにもかかわらず。そうした冷ややかなまなざしを跳ね返すかのようにおもいおもいに過ごす彼女らの姿は、まさに「平和な座り込み行動」（Constable ibid.）ともいえよう。

エスノグラファーたちが注目するのは、このようなウィットとユーモアをたたえた、まさに「弱者の武器」（Scott 1987）である。上述の「偽ファッションショー」然り、そして、屋外ヘアサロンで地元男性に罵声を浴びせかけていた「エリー」もまた、「地元香港人と海外からきた労働者のあいだに、つかの間の役割転倒を引き起こした」と言える (Constable ibid.: 177)。Kayoko Ueno（2014）はこれら「女性たちが生き抜くためにとる日常的な戦略」に特に注目し、雇用主との直接交渉に乗り出す女性、ひどい目にあわされた業者や雇用主について悪い噂を流す女性、そして、「ご主人と奥様をどうあしらえばいいかわかっていれば、ここの家で働くのはたいへんではありません。二時間もあれば洗濯と掃除は終わります。奥様が帰ってきて、部屋がきれいでベッドがちゃんとできてれば、もうそれで喜びますから」 (Ueno 2014: 249)、と言ってのける

女性を紹介する。状況をコントロールしているのはマダムたちではなく、ヴァルネラブルな立場にあるはずのメイドたちである。Lan（2003）もまた、英語が苦手な台湾人雇用主に対して、フィリピン女性たちが内輪で彼ら彼女らをばかにし、笑いの種にしている様子を描き出す――「あの人たち、お金はあるかもしれないけど、英語は私のほうがうまいから！」。

もちろん、こうした「弱者の武器」には限界がつきものである。上述のような言語的・言説的な抵抗は雇用主に聞こえない舞台裏でだけ行われるものだし（Lan 2003: 154）、個人的なストレス発散のレベルにとどまることが多い（Constable 2007: 210）。Ueno もまた、仕事を失うというリスクを負うのは、雇用主ではなく、移住女性たちであるということに注意を促す（2014: 252）。「弱者の武器」は彼女らにつかのまの優位をもたらすかもしれないが、しかし、それ以外の場面ではマダムたちの意のままに働くメイドとしてふるまわせてしまうかもしれない。隠しておいたはずの舞台裏が知れたときには、「狡猾で横柄なメイド」といったステレオタイプを助長してしまうかもしれない。日常的で個人的な交渉はたしかに女性たちのエイジェンシーの発現であるが、しかしそれは結局のところ、女性たちのヴァルネラビリティを再生産するほうに働いてしまいかねないのである。国際分業の構造を覆すことは彼女らには決してできない――「雇用関係における権力のダイナミクスを決めるのは、やはり、経済的資本の分配なのだから」(Lan 2003: 157)。

3.3 想像力

いっぽうで圧倒的にヴァルネラブルな、しかし他方では力強く戦略的な主体でもある、移住家事労働者たち。彼女らが「被害者か、勝利者か victim or victor」（Momsen 1999）を問うよりも、弱い立場におかれながらもそこでもがき続ける――集合的に政治的に、個人的に日常的に――彼女らの多様性と複雑性を考えなければならないだろう。Marianne Githens（2013）は、国際的に移動する家事労働者のアイデンティティが社会的に構築されるさまを論じているが、そこに「競合しあうヴォイス（態／声）」をみとる。すなわち、第一に、女性たちは出身地と出向地の双方の政治や政策のもとにおかれ、第二に、移住者コミュニティ内部のダイナミクスにさらされている。前者が彼女らをヴァルネラブルな位置におくことはすでに述べたとおりだが、加えて、後者もまた男性優位の社会であることが多く、女性たちにサポートを与えるとともに彼女らを束縛することもある。そして Githen が強調するのが、第三に、女性たち自身の声である。経済的な自立や人としての成長の経験を語る女性たち、新たな環境のなかで順応したり交渉したりする術をもった女性たち、自分自身や家族、故郷についておもいを巡らせる女性たちもいる。これらの要素――つねに悲観的とはかぎらない――が複雑にからみあい、競合しあうなかで、移住女性たちの現実がおりなされていくのである。

重要なことに、女性と女性を引き裂く溝の彼岸においては、マダムたちもまた同様に、複雑な「ヴォイス」のもとに多様な現実を生きている。Lan（2006）の台湾におけるエスノグラフィーは、メイドだけでなくマダムをも対象とした数すくない調査研究のひとつだが、そこには、移住女性たちをモノ扱いし横暴に使い捨てる雇用主よりもむしろ、そうした「古い世代」に反発し、代替的な関係を築こうとする雇用主たち――相対的に若い、ミドルクラスの就労女性たち――が多く描かれる。平等な関係を築こうとするマダムたちや、厳密にビジネスライクな関係を保とうとするマダムたちのいずれも、家族の一員であってそうでない、被雇用者であってそれだけでない、割り切れない立場のメイドたちとの関係に苦慮している。「階級の上下のなかで暮らすなんて、私はいやなんです」（Lan 2006: 214）と話すひとりの女性は、しかし、同じテーブルで食事をしようにも、家事労働者の女性が居心地悪そうで自身も居心地悪くなってしまう、と嘆息する。同様に、Kitamura（2016）においても、香港在住の日本女性たちが「マダム」経験を語っているが、彼女らの多くが戸惑いや不安を口にする。慣れない土地で、誰かを雇い監督する、それも外国人を、自分の家のなかで、彼女の身元引受人となって。そのための知識もスキルも与えられていない女性たちのなかには、地元香港社会や現地日本人コミュニティに流布するステレオタイプ的言説――「彼女らは盗むから気をつけて」「手を抜かないように厳しくしないと」――を指針としてマダム役割を全うしようとする女性がいる。反対に、そのような偏見ゆえに雇用を見送る女性、そして制度じたいを批判的にみつめる女性もいる。いずれにせよ彼女らの誰もが、新たに負荷されるマダム役割との交渉を迫られるのである。

たしかにマダムたちは、トランスナショナルな外注によって掃除や洗濯といった家事から解放されるかもしれない。しかしそれらを担うメイドたちとの関係に心を砕き、彼女らの仕事に責任をもたなければならないのは、とりもなおさず、マダムたち自身である。まさに、家庭外の就労という第一シフト、家事という第二シフトに加えて、世帯内の精神的ケアという「第三シフト」が、いまや女性たちの肩に重くのしかかる。この、「女性と資本主義のぎこちない恋愛」が成就することはすくない（Hochschild 1997=2012）。重要なことに、それは、個々の女性たちの心構えや態度の問題ではなく、再生産労働をも

っぱら女性のものとし、彼女らを矛盾のただなかにすえおく社会構造があるからである。その意味では、メイドたちのヴァルネラビリティの裏側には、実は、マダムたちの葛藤や焦燥、絶望もあるとも言えるだろう。

したがって、女性たちの表面的な拮抗に目を奪われるのではなく、それを成り立たせている――そしてメイドたちにもマダムたちにもそこから外れることを不可能にする――構造をこそ、注視しなければならない（Constable 2009; Briones 2009）。ここで、Patricia R. Pessar and Sarah J. Mahler（2003）が提唱する「ジェンダーの権力地勢図」の枠組みを参照しよう。ジェンダーとそれをとりまく権力関係はまさに地勢図、入り組んだ地形や地勢のなかで立ち上がるものである。個人の社会的位置はそのなかにあって、空間的な制約に加え、社会的にも文化的にも規定されている。しかしそれは同時に流動的なものでもあり、たとえばGithensが論じたように、国家の政策転換によって、あるいは移民コミュニティ内部の変容によって、変化しうる。さらに重要なのは、Githensの「女性たち自身の声」と同様、Pessar and Mahlerがこの地勢図のなかに「想像力」というファクターを組み込んでいる点である。女性たちは今おかれた位置を超えて、別のありかたを想像しそして創造することができる。彼女らのエイジェンシーは、言うまでもなく、地勢図のなかの他の要素による制約を受けるが、しかし、ただ既存の構造を再生産しつづけるだけではなく、そのなかにひずみや攪乱をもたらしていくこともできるのである。

柄谷利恵子（2007; 2016）は、Pessar and Mahlerを引きつつ、女性移住ケア労働者たちがただ受身の被害者ではなく、国際移動によって自身の潜在的な能力に気づき、階層を上昇していく主体でもある、と論じる。特に、彼女らによるコミュニティ活動やネットワーク構築は重要である。しかし同時に、移住女性たちの政治活動を過大評価することは、彼女らがおかれた重層的な構造、そしてそこに生じる厳しい現実を軽視することにもつながり、控えなければならない、とも強調する。さらに柄谷は言う、

> 今必要なのは、この種の「政治活動」を「公的分野」における変革に結び付けていく手段の確保であろう。さらにそれをトランスナショナルな「地理的規模」で運用するための制度が構築される必要がある。そのためには、現在の「力の形状」において発言権を持つ者の「想像力」が、なににもまして発揮されなければならない。（柄谷 2007: 293）

グローバルシティの女性たち――メイドもマダムも――も、そして男性たちも、ひとつの地勢図のなかに位置づけられている。そこにはグローバルな不平等と性別分業が縦走し、労働者の「輸出入」政策が横行し、国籍と人種／エスニシティと階級とジェンダーとで市民権が階層づけられ、ステレオタイプと偏見があふれ、グローバリズムとネオリベラリズムが公私の境界線を揺らがせている。しかしそこに深くえぐられた女性間の溝を超えて、女性たちが想像力を働かせることもまた、できるはずである。実際にグローバルシティのあちらこちらでフォーマルに、インフォーマルに、攪乱を引き起こす女性たちがいる。そして同時に、上述したエスノグラファーたちがそうであったように、その声を聞き、そうすることで想像力を働かせる、相対的に強い立場におかれた女性たちもいる。いなければならない。そしてそこにこそ、フェミニズムのちからがあるはずである。

4 フェミニズムに何ができるのか

ジェンダーの権力の地勢図のなかにあって、女性たちは対立させられ、葛藤させられる。そのときフェミニズムには、第一に、その「溝」がどのようにして成り立つものなのか、どのような地勢図のもとにあるのか、その正体を明らかにすることができるだろう。ただ「狡猾なメイド」と「横暴なマダム」がいるのではなく、彼女らをそのようにしたてあげる重層的な構造を言語化し、可視化していく。こうした理論的な作業は、すでに参照してきた調査研究をはじめ、多くの研究者によってなされてきた（Constable 2009）。

第二に、より実践的に、この「溝」を超える橋渡しの作業もまた、フェミニズムにできるだろう。女性たちの断絶をそのままにせず、あちらとこちらの女性たちがともに想像力を働かせ、いつかほんとうの意味で出会うことができるような運動。特に、特権的な位置にある女性たちが、不利な状況におかれた女性たちに対してもつ想像力を涵養することが求められる。

香港のフェミニズム団体 Association for Advancement of Feminism （AAF、新婦女協進會）の活動に、こうした動きのひとつの例をみてみよう。以下、本プロジェクトにおいて2014年および2017年に筆者がAAFのメンバーに対して実施した聞き取り調査に基づき、香港というグローバルシティにおいて、どのように「超える・つなぐ」運動が萌芽しつつあるのかを

みていく。

4.1 国籍／エスニシティ／階層を超える・つなぐ

AAF は、香港の数ある女性団体・フェミニズム団体のなかでも中心的な位置にある NGO である。1984 年に設立され、現在 136 人のメンバーを有し、8 人の執行委員と 2 人の事務局員が日常的な運営にあたっている。AAF が掲げるミッションは、以下のとおりである、

1） セクシュアリティ、経済、社会文化、法のすべての分野において、女性に対するあらゆる差別を廃絶すること。
2） 女性たちがそれぞれの人格と資質を発展させるための自由と機会を享受できるよう、女性の権利と福祉のために闘うこと。
3） 女性解放運動の意識を促し、培い、社会のジェンダー平等のために尽力すること。

このように、AAF は明示的に「女性のための」運動である。設立当初よりメンバーが自主的に中小規模のワーキンググループを組織し、性差別廃絶のためのロビー活動、性差別ホットラインの運営、政府の婦女事務委員会や平等機会委員会のモニタリングなどを精力的に続けている。現在は 6 つのワーキンググループが存在し、「性と人権」「女性と身体労働」「リソース獲得」そして「移住家事労働者」などのテーマのもと、それぞれ活動している。

注目すべきは、AAF が「女性のための」というとき、その「女性」は香港出身の女性だけを意味しない、ということである。香港における「女」を、国籍や人種やエスニシティ、階層にかかわらず包括的に対象とするのである。2014 年に執行委員のひとりであった Annie Chan 氏によれば、香港の女性団体は大きく四種類に分けることができる。まず、体制に親和的な、地元の富裕層女性が中心となった団体（Hong Kong Federation of Women 全港各界婦女聯合協進會、Zonta Club 香港崇德社など）。次に、女性たちへの支援活動に特化した団体（YWCA 女青年中心、Hong Kong Federation of Women’s Centres 香港婦女中心協會、Association Concerning Sexual Violence Against Women 關注婦女性暴力協會、 Hong Kong Women Workers Association 香港女工協會など）。そして、ジェンダーとセクシュアリティの権利擁護を目的とする団体（Hong Kong Women Coalition of HKSAR 香港女同盟、 Nutongxueshe 女同學社、 Transgender Resource Center 跨性別資源中心など）。最後に、女性のための基金団体（HER Fund 婦女動力基金、Women’s Foundation 婦女基金など）。Chan 氏は言う、AAF は「これらのどれとも違う」――富裕層の内輪の集まりでもなければ、とある集団やひとつの目的に焦点を当てる活動でもない。事実、AAF では、香港社会の中心で活躍する女性たちが性差別や性暴力の犠牲とならないようロビー活動を続けるのと同時に、グローバルシティの周縁で生活することを余儀なくされる、たとえば移住労働者やセックスワーカー、先住民女性、そして近年では香港男性と結婚して大陸から移住する中国女性たちの支援にも、携わってきたのである。

なかでも、2015 年に正式に活動を始動した移住労働者ワーキンググループ（Migrant Workers Working Group 家務移工組）は、「香港の女性問題のなかに移民女性問題を位置づける」ことを目的としたグループである。このグループでは、香港社会において不可視化されている移住女性たちと、彼女らと街ですれ違い、ともすれば彼女らを自身の家で雇っている、地元香港の女性たちを、まさに「つなぐ」こことが試みられている。

グループでは、まず、2016 年 2 月から毎月 1 回、AAF メンバーを対象として読書会を開催した。最終的な目標は、移住家事労働者たちの現実について知り考えることだが、しかし、そのようにあからさまなテーマ設定をしてしまっては、もともと移住労働者問題に関心にない人びとをひきつけることができない。したがってリーディングセッションのタイトルには「移住女性」の語を用いず、「One of the Family　家族の一員」とし、「家族」というすべての人にとっての関心事のなかに移住家事労働者の問題が含まれることに気づきを促した。第一サイクル（2016 年 2 月から 5 月）では、本稿でも参照した Nicole Constable のエスノグラフィー（*Maid to Order in Hong Kong*）をはじめ、 小説や論文、ドキュメンタリー映画を題材とし、香港だけでなく台湾の状況についてもとりあげた。毎回 4 人から 18 人の参加があり、大学生、教員、元ソーシャルワーカー、そして移住家事労働者の雇用主の参加もあり、多様な視点から議論が繰り広げられたという。特に、「知らないことだらけだった」という参加者の反応からは、彼女らがふだんいかに想像力を制限され、近くにいるはずの移住女性たちを見えなくさせられているのかがうかがいしれる。

このサイクルの終了後、ワーキンググループではメンバーと参加者が集うパーティーを催した。ここでは親睦を深め、活動の感想を交換するのに加え、次サイクルの題材をみなが持ち寄り、次のテーマ設定のためのブレインストーミングが行われた。その結果、第二サイクル（2016 年 8 月から 2017 年 3 月）には、新聞記事や論文に加えて、移住労働者文学をとりあ

げたり、写真を用いて個人の経験を共有しあったりと、より幅広い内容がもりこまれた。このようにこの活動は、参加者たちがただ受動的に情報を受け取るのではなく、より積極的に知ろうとし、考えようとする水路づけにもつながっている。言い換えれば、断絶されていた女性たちが、国籍やエスニシティや階層の溝の向こうにいる女性たちについて自ら想像力を働かせるきっかけとなっているのである。

しかしながら、聞き取り調査において中心的メンバーたちも認めていたように、「読んで得た知識だけでじゅうぶんなわけがない」。移住家事労働者たちと、まさに溝を超えて、直接交流し対話する経験もまた、必要である。リーディングセッションの限界を感じ、ワーキンググループでは第二の活動、「オープンニュース」も開始したところである。これは、毎週日曜日に家事労働者たちが集まる場所――まず、インドネシア出身者が多いヴィクトリアパーク――に出かけていき、彼女らと今香港で起きていることについて対話する、というものである。広東語も英語も流暢でない、そして社会的文化的文脈も共有しない彼女らにとって、香港のニュースは理解しづらいものである。そこで移住女性たちが関心のあるニュースをAAF メンバーが解説することで、彼女らの社会的包摂を手助けする。と同時に、ただ一方的に「教えてあげる」のではなく、香港人が知らないインドネシアの時事について移住女性たちに教えてもらう。移住家事労働者たちが多く集うこれらの場所には、彼女らのための支援団体やグループも多く出入りするが、しかしオープンニュースは、「そういうパンフレットを配って終わり、という活動ではない」ことが重要である。あくまでも双方向の「交流」「交換」を目指そうとする試みなのである。メンバーのひとりは言う、「だから、時間はかかります。ランダムに近づいていって話しかけてってわけにはいかないから。まずは移住労働者たちのグループと協力して、そこのメンバーの人たちと私たちがいっしょにいるところを見てもらうところから始めています。そうすると、ああ、あの人たちは仲間だっておもってもらえる」。断絶があまりにも深いとき、それを超える・つなぐ試みが容易でないのは当然だといえるだろう。女性たちが「平場」の関係を築くには様ざまな調整が必要である（荒木章を参照）。

と同時に、時間をかけて知りあおうとする努力は、別のかたちで実を結びつつある。香港では、2015 年から毎年、移住者プライドパレード（Migrant Pride Parade）が開催されており、この日には移住労働者であり LGBT である人びとが、その複層的なヴァルネラビリティを跳ね返すかのように街を練り歩く。この運動は、LGBT 問題には関心を寄せるが移住労働者問題には関心がない、あるいは、女性問題にはコミットしているが LGBT や移住女性のことは念頭にない、といった、運動と運動のあいだの溝を超える試みともなる。事実、「香港の LGBT 運動が人種や階級の問題に触れることは少ない」（WK News）ともいわれるなか、このパレードのような差異を横断する運動は重要である。2017 年、AAF の移住労働者ワーキンググループは、このイベントに招かれた。よりヴァルネラブルな位置にある移住女性たちが、より特権的な地位にある地元女性たちに協働を呼びかけたのである。女性だけ、移住労働者だけ、LGBT だけ、ではなく、様ざまな差異を超えてつながろうとする女性たちのちからが生まれつつある。

ワーキンググループでは、今後、さらなる活動が企画されている。ひとつには、移住労働者を雇う「マダム」である AAF メンバーに焦点を当て、彼女らが経験やおもいを共有しながら、フェミニスト的に移住女性を雇うとはどういうことかを正面から議論する、という企画がある。女性の自由や平等をうたいながら、自身の家で女性を雇う、という「居心地の悪さ」は、多くの女性の経験するところでありながら光を当てられることが少ない。そうした対話を始めていくこともまた、女性たちの想像力の涵養のひとつの方法だといえるだろう。と同時に、中上流階級の、高学歴の、香港出身の女性たちが中心となった AAF という組織の内部に、攪乱をもたらすことにもつながっていく。

4.2 困難と課題

しかしながら、女性と女性を引き裂く溝を乗り越えるべく努力する女性たちの活動には、困難もすくなくない。AAF の活動は、すでに明らかなように、トラブル・メイキングを特徴とする。体制に親和的な女性組織であれば、政府の掲げる香港社会像――多民族・多文化が共生する“Asia’s World City”――を疑うことなく、それに沿って、活動を展開するだろう。たとえばグローバルエリート女性による交流会や、女性企業家のためのセミナーを開催するなどして。あたかも、彼女らを陰で支える低所得職種の移住女性たちなどいないかのように。あたかも、それら女性たちは「香港の女性」ではないかのように。メンバーによれば、AAF の攪乱的な活動は、それゆえに、公的資金を受けることが難しい。したがって運営のための資金不足は AAF にとって恒常的な問題である。2014 年の調査時には、金銭的な問題からウェブサイトがダウンしていたが、

その後改善されることなく、ブログやFacebookがAAFの主要メディアとなっている。現在はファンドレイジングやメンバーによる年会費（500 HKドル）および寄付に頼って運営がなされている状態にあり、不安定であるといわざるをえない。当初は4名いた専従スタッフも、現在は2名である。今ある社会構造のなかでトラブルを起こし続けるがゆえの経済的基盤の弱さは、ジレンマというほかない。

さらに近年の香港社会の変動もまた、AAFの活動に暗い影を落としているという。2014年の香港反政府デモ、雨傘運動には、AAFの特に若いメンバーたちも参加し、座り込みやスピーチを通して政府への抗議活動を繰り広げたのに加え、運動内部のセクシュアルハラスメントを問題化するなど、深い関わりをもった。しかし運動が終息した後、香港社会全体に、社会運動・市民運動への失望がただよい、AAFのメンバーのなかにはそれが原因で海外へ居を移した者もいた。メンバー数は全体で10％減ったという。香港政府はいよいよ中国政府寄りになり、したがってロビー活動も成果をあげにくくなっている。AAFでは、そのため、戦略を変更し、地方レベルでの働きかけに活動をシフトしてきているが、移住家事労働者の状況改善――法外な仲介手数料からの解放、住居の自由の獲得、「2週間ルール」[注4)]の撤廃など――は、いっそうの困難をきたしている。

香港市民の意識向上を目指す移住労働者ワーキンググループも、日々困難に直面している。参加者のなかには、本や論文を読んで知識を深めることには興味があっても、実際に街に出て移住女性たちと交流することには二の足を踏む人、移住女性の問題には政治的関心を寄せていても、インドネシアやフィリピンのニュースには関心がない人もいるため、オープンニュースの活動はいまだ軌道に乗ったとは言い難い。このグループでは、参加者たちを教え導くのではなく、ともに考え行動していくことを軸にしようとする以上、こうした無関心の壁は大きな問題となって立ちはだかる。「特権に無自覚なマジョリティ」への働きかけ（古久保章）は、まさに「時間がかかる」活動である。

最後に、AAFが「香港の女性」をより包括的に想像し、活動を拡大しているいっぽうで、それでもそこからこぼれ落ちる女性たちがいることも、指摘しておかねばならない。不平等な社会制度に抵抗し不当な労働条件を交渉する移住女性、広く厚いネットワークを構築し自助活動に熱心な移住女性がいるいっぽうで、そうした活動に参加できない、させてもらえない、移住家事労働者もいる。AAFの活動はそこにまで手を届けるには、いまだ至っていない。不可視化された集団のなかで、さらに声をもつことのできない女性たち――語ることのできないサバルタンたち――を、いかに「香港の女性」のなかに組み込んでいくか、という大きな課題が残されている。

特に近年アジアでは、フィリピン、インドネシアに次いで、タイやミャンマーといった他の東南アジア出身の移住家事労働者も増えている。フィリピンやインドネシアの政府が自国出身の労働者保護政策を、ふじゅうぶんながらも、講じているのに対し、他の地域ではいまだ体制が整わず、彼女らの自助組織も確立されていない。そうしたなかでよりいっそうヴァルネラブルな立場におかれるタイやミャンマー女性たちは、すでに「安くて済む」「従順で雇いやすい」などと言われ始めてすらいる。このようにグローバルシティはその裾野を際限なく広げ、さらに階層化していく。次々に新たなサバルタン女性たちが創出されていく社会においては、フェミニズムの課題も増え、広がるいっぽうである。

5.「女」を再想像する

アジアのグローバルシティにおける女性たちの分断は、根深く、複雑である。特に、「マダム」と「メイド」の関係は、表面的には、家庭外就労で疲弊した富める女性たちを、より貧しい地域からきた女性たちが報酬を受けて助ける、互恵的なものに見えるが、その実、女性たちを対立させ、隔絶し、抑圧し、そして性別分業とグローバルな不平等を再生産する、不幸な仕組みとなってしまっている。しかし同時に、グローバルシティには、そのヴァルネラブルな位置から声をあげ、自らの権利を主張する女性たちがいる。加えて、女性と女性のあいだに走る溝を超えるための想像力を培おうとする女性たちの活動もあった。困難と課題が山積するなかで、女性たちは溝のあちらでもこちらでも、ただ無力にあるいは無関心に、たたずむだけではない。

いっぽう、日本は長く、こうした移住労働者の問題については「例外」とみなされてきた（Douglass 2006; Brooks and Devasahayam 2010; Piper 2008）。少子高齢化と労働者不足がどれだけ深刻化しようとも移民の受け入れに消極的であった日本政府だが、1990年の出入国管理及び難民認定法（入管法）の改訂に続き、近年、外国人技能実習制度やEPA外国人看護師・介護福祉士候補者受入れなど、その重き扉をじょじょに開きつつある。2015年には、国家行政特別区域外国人家事支援

人材受入事業が導入され、3年という年限つきの就労ビザで日本の家庭で働く移住家事労働者――「家事支援人材」という奇妙な呼ばれ方の――の受け入れが進められている。国内の女性の就労継続を可能にしつつ、しかし上述のような、アジアの他地域が抱える問題を避けるために、この制度においては、個人間の雇用契約は禁じられており、特区内の事業所があいだに入ることが義務づけられている。これら事業所には、労働者の住居を確保すること、労働者の職務内容を雇用主にかわって指示すること、苦情や相談窓口を設けることなども義務づけられている。

この仕組みは、しかしながら、ほんとうに移住家事労働者たちを保護するものだろうか。同じ家のなかにいながら直接指示がない、すなわち雇用主とのコミュニケーションが断絶されたなかで働くことが、労働者を益するようにはおもえないし、また、マダムたちのコントロールからは逃れられたとしても、彼女らの身体は事業所によって依然として縛りつけられている。相談先が雇用主と直結した事業所というのも、あまりに心もとない。なによりも、日本政府がいまだ国際労働機関「家事労働者のためのディーセント・ワークに関する条約」を批准してすらいないという現実を鑑みるに、この制度が拙速に、なおかつ特区という限定的な場所で秘密裏に、始まろうとしているという事実は、危惧を抱かせるにじゅうぶんである（アジア女性資料センター・移住労働者と連帯する全国ネットワーク 2014）。

同時に、「マダム」たちが複数のシフトから解放され、「活躍促進」されることになるのかも疑わしい。雇用主の女性たちは、上述のような居心地の悪さを抱え続けねばならないが、しかし直接指示することすらできないという、マダムであってマダムでない、奇妙な立場に置かれる。彼女らが移住家事労働者とどう接するべきかを学ぶ機会も、そもそもその女性たちががどんな背景で経緯でそこにいるのかを知る手段も、用意されていない。しかし、いったん制度を導入すればそれで問題は解決したかのように、あとは個々の女性間でどうにかすべきことであるかのように、扱われてしまうのでないか。そのように新自由主義が、社会や政治そして私的領域にまで侵食するとき、言うまでもなく、女と女の間の分断は深まり、女たちはいっそう引き裂かれ、そして男たちは再生産労働から遠く離れたままである。事実、日本の女性たちがいくつものシフトを抱えて悲鳴をあげている現在、それを安易に外国人に肩代わりさせることは、ほんとうの解決とはほど遠い、そう注意を喚起する声も少なくない（竹信 2015）。

他のグローバルシティで起きたように、日本社会が、これからいやがおうにも増えるであろう移住女性たちの存在を「うまいぐあいに不可視化」（Sassen 2002: 255）し、彼女らをヴァルネラブルな位置におしやっていくであろうことは想像に難くない。そうすることで、日本の女たちに新たな困難や葛藤ががもたらされるだろうことも。そのとき、日本のフェミニズムもまた「女」を再想像する必要に迫られるだろう。「日本の女性」というなかに、異なる国籍や人種やエスニシティの女性たちも含みこむ。「女性問題」というなかに、中心からはずされた女性たちの声も汲みこむ。ただ弱い立場の女性たちを支援してあげる、助けてあげるだけではなく、異なるニーズを抱えながら、しかし、共通の信念のもと、彼女らと協働していくために。それは、AAF がそうであるように、特権的な自らの足下を問い直す作業にもつながっていくだろう。そこに広がる溝を再可視化し、それを超えるために。分断された女性と女性をすこしでもつなぐために。

謝　辞

AAF での調査では、以下の方々に多大なるご協力をいただいた――Annie Chan 氏、Amy Yeung 氏、Doris Lee 氏、Cat Mak 氏。彼女らのご厚意に感謝するとともに、その熱意と行動力に敬意を表したい。

【 付 記 】

本稿は、平成 26-29 年度科学研究費基盤（B）研究課題「ジェンダー平等社会の実現に資する研究と運動の架橋とネットワーキング」（課題番号 26283013）の助成を受けた研究成果の一部である。

https://doi.org/10.18910/67844

文　献

アジア女性資料センター・移住労働者と連帯する全国ネットワーク，2014,「拙速な『外国人家事支援人材』受け入れに抗議し、ILO 家事労働者条約の批准を求める共同声明」（2017 年 12 月 22 日取得，http://ajwrc.org/jp/modules/bulletin3/index.php?page=article&storyid=65）

Boris, Eileen and Rhacel Salazar Parreñas, 2010, “Introduction,” Eileen Boris and Rhacel Salazar Prreñas eds., *Intimate Labors: Culture, Technologies, and the Politics of Care*, Stanford: Stanford University Press, 1-12.

Briones, Leah, 2009, *Empowering Migrant Women: Why Agency and Rights are not Enough*, London: Routledge.

Brooks, Ann and Theresa Devasahayam, 2011, *Gender, Emotions and Labour Markets*, London: Routledge.

Constable, Nicole, 2007, *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Migrant Workers (2nd ed.)*, Ithaca: Cornell University Press.

――, 2009, “The Commodification of Intimacy: Marriage, Sex, and Reproductive Labor,” *Annual Review of Anthropology*, 38: 49-64.

Douglass, Mike, 2006, “Global Householding in Pacific Asia,” *International Development Planning Review*, 28(4): 421-445.

Githens, Marianne, 2013, *Contested Voices: Women Immigrants in Today’s World*, New York: Palgrave Macmillan.

Hochschild, Arlie Russel, 1997, *The Time Bind: When Work Becomes Home and Home Becomes Work*, New York: Metropolitan Books.（=2012，坂口緑・中野聡子・両角道代訳『タイム・バインド（時間の板挟み状態）――働く母親のワークライフバランス』明石書店.）

――, 2002, “Love and Gold,” Barbara Ehrenreich and Arlie Russel Hochschild eds., *Global Woman: Nannies, Maids and Sex Workers in the New Economy*, New York: Henry Holt, 15-30.

イプ・ピュイ・ユ，2005,「香港の移民家事労働者――その背景と主な問題」浅野浩司訳,『女たちの 21 世紀』83, 15-17.

伊豫谷登士翁，2013,「グローバル空間としての『アジア』と人の移動」伊豫谷登士翁編『移動という経験――日本における「移民」研究の課題』有信堂，211-232.

Justice for Erwiana Action Centre, 2017,“Justice for Erwiana,”（2017 年 12 月 22 日取得，http://hkhelperscampaign.com/en/justice-for-erwiana/）

柄谷利恵子，2007,「女性移住労働者の『安全（Security）』と『非・安全（Insecurity）』――国家、地域、グローバル」辻村みよ子編『国際法・国際関係とジェンダー』東北大学出版会，273-298.

――，2016,『移動と生存――国境を越える人々の政治学』岩浪書店.

Kitamura, Aya, 2016, “Hesitant Madams in a Global City: Japanese Expat Wives and their Global Householding in Hong Kong,” *International Journal of Japanese Sociology*, 25 (1): 58-69.

Lam, Theodora, Brenda S.A. Yeoh and Shirlena Huang, 2006, “Global Householding in a City-State: Emerging Trends in Singapore.” *International Development Planning Review*, 28 (4): 475-497.

Lan, Pei-Chia, 2003, “‘They Have More Money but I Speak Better English!’: Transnational Encounters between Filipina Domestics and Taiwanese Employers,” *Identities: Global Studies in Power and Culture*, 10(2): 133-161.

――, 2006, *Global Cinderellas: Migrant Domestics and Newly Rich Employers in Taiwan*, Durham: Duke University Press.

Lindio-McGovern, Ligaya, 2013, *Globalization, Labor Export and Resistance: A Study of Filipino Migrant Workers in Global Cities*, New York: Routledge.

Momsen, Janet Henshall, 1999, “Maids on the Moves: Victim or Victor,” Janet Henshall Momsen ed., *Gender, Migration and Domestic Service*, London: Routledge, 1-20.

落合恵美子，2012,「親密性の労働とアジア女性の構築」落合恵美子・赤枝香奈子編『アジア女性と親密性の労働』京都大学学術出版会，1-34.

小ヶ谷千穂，2001,「『移住労働者の女性化』のもう一つの現実――フィリピン農村部送り出し世帯の事例から」伊豫谷登士翁編『経済のグローバリゼーションとジェンダー』明石書店，161-186.

Ogaya, Chiho, 2004,“Filipino Domestic Workers and the Creation of New Subjectivities,”*Asian and Pacific Migration Journal*, 13: 381-404

小ヶ谷千穂，2008,「移住家事労働者における『ヴァルネラビリティ』の構造と組織化の可能性――香港におけるインドネシア人家事労働者の事例」伊藤るり・足立眞理子編『国際移動と＜連鎖するジェンダー＞――再生産領域のグローバル化』作品社，93-113.

Ong, Aihwa. 2006. *Neoliberalism as Exception*. Durham: Duke University Press.（=2013，加藤敦典，新ヶ江章友，高原幸子訳『《アジア》例外としての新自由主義』作品社.）

Ong, Fred C.M. and Brenda S.A. Yeoh, 2013, “The Place of Migrant Workers in Singapore: Between State Multiculturalism and Everyday (Un)Cosmopolitanism,” Lai Ah Eng, Francis L. Collins and Brenda S.A. Yeoh eds., *Migration and Diversity in Asian Contexts*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 83-106.

Pessar, Patricia R., and Sarah J. Mahler, 2003, “Transnational Migration Bringing Gender In,” *International Migration Review*, 37 (3), 285-306.

Piper, Nicola, 2008, “Political Participation and Empowerment of Foreign Workers: Gendered Advocacy and Migrant Labor Organising in Southeast and East Asia,” Nicola Piper ed., *New Perspectives on Gender and Migration: Livelihood, Rights and Entitlements*, New York: Routledge, 247-274.

Piper, Nicola and Keiko Yamanaka, 2008, “Feminized Migration in East and Southeast Asia and the Securing of Livelihood,” Nicola Piper ed., *New Perspectives on Gender and Migration: Livelihood, Rights and Entitlements*, New York: Routledge, 159-188.

Sassen, Saskia, 1991, *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton: Princeton University Press.（=2008，伊豫谷登士翁監訳，大井由紀，高橋華生子訳『グローバル・シティ――ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房.）

――, 2002, “Global Cities and Survival Circuits,” Barbara Ehrenreich and Arlie Russel Hochschild eds., *Global Woman: Nannies, Maids and Sex Workers in the New Economy*, New York: Henry Holt, 254-274.

Sautman, Barry, 2004, “Hong Kong as a Semi-Ethnocracy,” Agnes S. Ku, Ngai Pun, and Bryan S. Turner eds., *Remaking Citizenship in Hong Kong*, London: Routledge, 115-138.

Scott, James, 1987, *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, New Haven: Yale University Press.

竹信三恵子，2015,「外国人家事支援人材制度の闇――「女性活躍支援」の名で進む女性の貧困化策」『女たちの 21 世紀』83，6-11.

上野加代子，2011,『国境を超えるアジアの家事労働者』世界思想社.

Ueno, Kayoko, 2014, “Strategies of Resistance among Filipina and Indonesian Domestic Workers in Singapore,” Emiko Ochiai and Kaoru Aoyama eds., *Asian Women and Intimate Work*, Leiden: Brill, 239-261.

WK News,“What they say before the 2nd Migrant Pride Parade HK?,”（2017 年 12 月 22 日取得, https://wknews.org/project/2/1/1286）

Yuval-Davis, Nira, 2006, “Intersectionality and Feminist Politics,” *European Journal of Women’s Studies*, 13(3): 193-209.

Abstract

Possibilities for Feminism beyond National/Ethnic/Class Divides: Women in Asian Global Cities

Aya Kitamura

This chapter focuses on Asian global cities where rapid economic growth has intensified issues concerning globalism and neoliberalism along with gender. What are the possibilities of feminist activism when there are national, ethnic and class differences among women? How do women negotiate such divides and disparities?

Ethnographic studies show that in Asian global cities migrant domestic workers’ lives involve both vulnerability and agency. Confined under state policies that regard them as labor rather than as human beings, the “maids” are often exposed to physical, verbal and sexual violence and exploitation. Simultaneously, many such women resist oppression through formal activism as well as informal networking, unifying and raising their voices. The studies also find female employers often express insecurities and conflicts over their new role;“madams,”through transnational outsourcing of housework, face a new set of predicaments. Thus, the “maid-madam” relationship, although seemingly mutually beneficial, may deepen divides and disparities among women, while leaving intact gendered divisions of labor as well as global inequality.

An attempt to go beyond such divides can be seen in the activism of the Association for the Advancement of Feminism, an NGO in Hong Kong. Their Migrant Workers Working Group aims to “make migrant women’s problems a Hong Kong women’s problem.” They conduct a study-group activity that breaks through widespread indifference in Hong Kong society, and also provide opportunities for locals to interact directly with migrant women. Their collaboration with migrant workers’ groups has led to participation in the Migrant Pride Parade that exemplifies solidarity among migrants, the LGBT community, workers, and women. Such activities, although not without difficulties and limitations, have provided a means for women in different social positions to join forces.

Reflecting on the experiences of Asian global cities can provide an insight into the possible issues that will arise in Japan, where the “Foreign Human Resources for Domestic Work Support” system has just begun. Migrant domestic workers—called “resources” here—will inevitably be put in a vulnerable position in Japanese society, and hence feminism in Japan must also strive to “make migrant women’s problems a Japanese women’s problem.”

Key words: Asian global cities, divides and disparities among women, migrant domestic workers, feminist activism

注 釈 一 覧

国籍／エスニシティ／階層を超える・つなぐフェミニズム――アジアのグローバルシティと女性たち

1）　日本のフェミニズム運動における女性間の差異をめぐる葛藤については荒木章を参照。（p. 1）

2）この団体は広東語と英語のバイリンガルで運営されているが、聞き取り調査を英語で行い、また、資料の提供も英語で受けたため、本稿では主に英語表記を用いる。（p. 1）

3）社会的に劣位におかれた女性への性暴力が正当化される構造については、牟田章2節を参照。（p. 4）

4）香港のForeign Domestic Helper制度では、ひとつの契約が終了したのち、就労ビザが有効なのは2週間までとなっている。多くの移住家事労働者がこの短期間で次の雇用主をみつけることができず帰国を余儀なくされ、次に入国するために再度業者に手数料を払うことになってしまう（小ヶ谷2008; イプ2015）。（p. 11）